

無形文化財の伝承と活用をジオパークで考える ～アイヌ文化を例に～

企画・運営

企画 保全ワーキンググループ

コーディネーター 竹之内耕（糸魚川ユネスコ世界ジオパーク）／市橋弥生（佐渡ジオパーク）

概要

演劇や音楽、工芸技術などの無形の文化財は、それぞれの地域で育まれてきたものであり、その成立の背景には、それぞれの地域の自然環境とそこで暮らしてきた人々の文化の積み重ねがある。こうした関係性を可視化し、それをジオパーク活動の中にどのように位置づけ、いかに次世代へ伝承していくかを私たちは考えていかなければならない。様似に伝わるアイヌ古式舞踊は、国重要無形文化財とユネスコ無形文化財に指定・登録されており、踊りや楽器、伝統料理などの伝承、保存活動がすすめられている。また、アイヌ語由来の地名が、大地と暮らしの関係性やその歴史を語る時に取り入れられている。こうした無形の文化財の伝承や活用の実際について、講義と見学会で学び、ジオパークにおける無形の文化財の意味やジオパークを利用した伝承や活用の方法について考え、議論を行った。

内容

10月6日（土）

13:30～15:00 現地見学会「アイヌ語地名巡り」

アイヌ語由来の地名が残るジオサイトを巡り、地名がどのようなアイヌの伝説から起こったのか、風土や暮らしの視点から学んだ。

15:00～15:15 趣旨説明

15:15～16:00 講義『無形文化財の伝承と活用をジオパークで考えるーアイヌ文化を例にー』
大野徹人氏（アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク）

10月7日（日）

9:30～10:15 事例発表

1. 「民話」 竹之内耕（糸魚川ユネスコ世界ジオパーク）
2. 「石工技術」 市橋弥生（佐渡ジオパーク）
3. 「男鹿のナマハゲ」 鎌田 栄（男鹿半島・大潟ジオパーク）
4. 「佐陀神能と浦々」 森江和文（島根半島・宍道湖中海ジオパーク）
5. 「地学に関わりのある無形文化財の保存」 目代邦康（日本ジオサービス㈱）

10:15～10:30 コーヒーブレイク

10:30～11:30 グループ討議「無形の文化財をジオパークの中で活かしていくためには何が足りないのか、何をすればいいのか」

11:30～12:00 発表

まとめ

無形の文化財の伝承と活用について、アイヌ文化を例に講義と現地見学会から学び、また各地から報告された民話や石工技術、祭り、能楽の伝承と活用についての現状や課題を知った後、「無形の文化財をジオパークの中で活かしていくためには何が足りないのか、何をすればいいのか」を考えるグループ討議を行った。無形の文化財の価値づけを行う、それらの記録を保存する、大地と文化財とのつながりを見つけていく、ツアーに無形の文化財を取り入れてみる、将来の担い手である子どもたちへの伝承を行う、活用がうまくいくことが保存の前提、もっと地域住民に無形の文化財の価値を伝えるなどの意見やアイディアが出された。無形の文化財には、自然や大地と人との関係性を示すものがあり、ジオパークの重要な構成要素として積極的に活用していくべきことを学んだ。

企画運営者の 総括・感想

無形の文化財を初めて分科会のテーマに選んだ。無形の文化財はジオパークに取り入れていくべき要素でありながら、あまり意識されて活用されていない現状がある。今回の分科会を通して、無形の文化財には、自然と暮らしの関係が示されているものがあり、それらはジオパークに大いに活用されていくべきものであることが理解されたと同時に、それらを伝えていく具体的な方法や伝承の難しさなどを知ることができたと思う。とくにアイヌの地名の起こりは、無形の文化財の伝承と活用について興味深く学ぶための良い教材となった。アイヌ文化の講義や現地案内を懇切丁寧にいただいた大野徹人氏（アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク）に厚くお礼申し上げたい。各地から紹介された事例からは、記録を残すことの重要性や伝承者養成の難しさ、伝える工夫の必要性などが参加者に伝わったと思う。無形の文化財が、ジオパークへ導入され、自然と人々との関係の来し方や行く末を考える良い題材になっていくことを願う。

（竹之内）



冬島の穴岩で（講師の大野氏）



グループ討議のようす



自然災害とユニバーサルデザイン ～すべての人が心地よく過ごせるジオパークを目指して～

企画・運営 企画 UDWG（ユニバーサルデザインワーキンググループ）

コーディネーター 松原典孝（兵庫県立大学）、西島昭治（霧島ジオパーク・ユニバーサルデザインフォーラム）、丸橋暁（ジオゆに）、山本浩之（ジオゆに）、坂之上浩幸（霧島ジオパーク）

概要

美しい風景や地域性を育む地球の活動は、時には人に対し地震や津波、火山噴火、斜面災害などの形で様々なリスクをもたらす。社会には健常者から障がい者、お年寄りから子供、外国人と多様な人が、住人、訪問者など多様な立場で存在するため、地球活動による多様なリスクへの対応は決して単純ではない。自然現象に対する知識レベルの差も、自然災害への対応を困難にしている。一方で、人は多様な地球活動と生き続けることで、多様な「地球と共生する知恵や工夫」を築き上げてきた。それを全人類で共有することは、持続可能な人と地球の共生につながる。

本分科会では、多様な人が地球と共生し続けるために自然災害とどう向き合っていくべきか、ユニバーサルデザインの観点からフィールドワークやワークショップを通じて議論するとともに、各ジオパークで取り組んでいる、様々なリスクを軽減する手法や経験を共有した。

内容

【10月4日～5日】

洞爺湖有珠山UGGpプレ巡検「減災文化と火山の恵み～秋の有珠山満喫ツアー～」

【10月6日（土）】

14:00～14:10 趣旨説明

14:10～14:30 座学「ジオパークにおけるユニバーサルデザイン、洞爺湖有珠山プレツアー概要報告」：松原典孝

14:30～16:00 ワークショップ（途中、コーヒープレイクあり）

【10月7日（日）】

9:30～12:00 前日に引き続きワークショップ
（途中、コーヒープレイクあり）

12:00～12:30 昼食（分科会会場でお弁当）

プレ巡検では、本分科会コーディネーター及び参加者の一部が「減災文化と火山の恵み～秋の有珠山満喫ツアー～」に参加し、多様な人を前にした時、各種リスクに対してどう対応できるのか、自然現象を学ぶ際どう学びの場を与えられるのか等について現場で議論を行った。特に、有珠山2000年噴火の際、避難所生活をしたガイドさんの実体験より、多様な人に対し、どう接すればよいか、何ができるのか等について理解を深めた。昭和新山では、補助装置を増設した車椅子を用いて、車椅子目線の見え方や、フィールドでの対応等について議論した。

座学では、過去の大会の議論を振り返り、ジオパークにおいてなぜユニバーサルデザインに取り組むべきなのか等について議論したほか、多様な人がどうすれば地球の多様な現象と持続的に生き続けられるか等について、国内外の取り組みやプレジオツアーを例に、知識・経験を共有した。

ワークショップでは、「火山災害」「地震災害」「斜面災害」等を想定し、「住む人や受け入れる人の視点」「訪れる人の視点」に着目して、自然現象発生の際に「多様な人」に対して自分たちやジオパークが何をするのか、何ができるのかを議論した。

まとめ

参加者の多くは「ユニバーサルデザイン目線での防災・減災」のような議論を経験していなかったが、様々な現象や多様な人を想定することで、より具体的に議論を進めることができた。ワークショップの中からは、「多様な人が存在することを認識しなければならない」「まず教育が重要。どのような現象が起こるのか、多様な人がそれぞれ学ばなければならない」「災害時、様々な人が様々な状況に陥る。それに対し、できる人ができることをすることで様々な課題を克服できる」「情報収集や理解にも差がある」「多様な人同士でコミュニケーションを取り続けることが重要である」等の意見が挙げられた。最後に、時に災害につながる多様な地球活動と共生するため、ユニバーサルデザインの考え方を生かし、人が多様であることを認識し、コミュニケーションに努め、的確な情報を把握し、共有していくことを参加者間で合意した。

企画運営者の 総括・感想

過去2回の全国大会で実施した「ジオパークにおけるユニバーサルデザイン」分科会だったが、今回は切り口を「自然災害とユニバーサルデザイン」に変え議論した。答えが一つではない難しいテーマではあったが、火山活動や地震活動、斜面災害等様々な自然現象を背景に持つ様々なジオパークから参加者が集まった結果、多様な視点で意見を交わすことができた。また、そもそも地球活動がもたらす諸現象は多様であり、そこで生き続けてきた人の経験と知識もまた多様であることを認識することにもつながった。日々の活動の中で多様性に気付く機会は決して多くない。今後とも各地で得られた経験をより多くの人と共有し、人類の知識を増やしていくことが求められる。

(松原)



Discussion with Prof. Nickolas ZOUROS ～坂下町長によるミニ巡検～

企画・運営 企画・運営 日本ジオサービス株式会社
コーディネーター 目代邦康

概要

ジオパークの活動の質を向上させるためには、リーダーが高い目標を持ち活動を牽引していく必要がある。そのために、本分科会ではGlobal Geopark Network (GGN) Presidentのニコラス・ゾウロス（エーゲ大学）教授と意見交換をし、ジオパークの基本理念を深く理解する。そうした議論を通じて、ジオパークにおけるリーダーの役割やマネジメントのあり方について考える。

ニコラス・ゾウロス教授の他、GGN individual memberであり、ユネスコ世界ジオパークの中田節也、渡辺真人、柚洞一央各氏も登壇し、参加者とともに議論をすすめる。

内容

10月6日（土）

14:00～14:35 ニコラス・ゾウロス教授と質疑応答

14:35～14:50 グループワーク（質問内容についての検討）

14:50～16:00 ニコラス・ゾウロス教授と質疑応答

10月7日（日）

9:30～12:00 坂下様似町長によるミニ巡検

まとめ

開会式に続いて行われたニコラス・ゾウロス教授（エーゲ大学）の基調講演「ジオパークの魂－世界ジオパークネットワークの活動」では、質疑応答の時間が十分取れなかったため、この分科会の時間を使って、各ジオパークの協議会会長や事務局長らがゾウロス教授に質問するようにした（写真1、2）。

最初に渡辺真人氏や柚洞一央氏が口火を切って質問をしたが、その後、続かなかったため、一度中断し、グループワークを行い、質問内容を検討した。その後、グループごとに質問し、ゾウロス教授との質疑応答をすすめ、ジオパークに関しての理解を深めた。

企画運営者の 総括・感想

地質遺産の保全や持続可能な開発など、ジオパークにおける諸々の活動の質の向上のためには様々な人とのコミュニケーションが必要である。今回のニコラス・ゾウロス教授との議論の時間は、参加者のジオパークについての認識を向上させるための場として企画された。しかしながら、企画運営者が想定していたほどは、活発な議論とはならなかった。それは、本分科会の目的である、ジオパークの活動を牽引していくリーダーが、ゾウロス教授と議論し、今まで以上にジオパーク活動についての理解を深めるということが、参加者に十分に伝えきれなかったことがある。また、日本の各ジオパークのリーダーの多くがジオパークの質の向上についてゾウロス教授と議論をしようという意識が希薄であったこともあるだろう。本分科会の参加者から出た質問の多くは、自らが関わっている地域についての質問が多く、グローバルな視点での質問やジオパーク活動の質を向上させるための建設的な意見などは出てこなかった。日本の多くのジオパークの運営方式が、推進協議会方式をとっており、リーダーが首長となっていることが多い。首長はもちろんジオパーク専従ではなく、地域の様々な問題解決に対して仕事をしなければならない。そのため、地域のためのジオパークの活用ということは考えられても、地域のジオパークの活動によってどう世界に貢献するのかということを考えるのは職責上難しいだろう。そうした背景があるため、ゾウロス教授との議論の場ができたとしても、地域で抱えている問題の吐露が続くということになってしまったと思われる。今回の質疑応答の中でジオパークの運営に関して「日本型」という言葉が何度か出てきた。「日本型」とはまさしく上述の運営体制のことであり、本分科会でその限界が図らずも認識されることとなった。とはいえ、この「日本型」には約10年の蓄積があり、その良い点もある。今後は、様々な世界のジオパーク関係者とのコミュニケーションを通じて、世界から学び、そして日本から情報発信するという相互協力関係を作り出していかなければならないだろう。

（目代）



ニコラス・ゾウロス教授（写真中央）



坂下様似町長によるミニ巡検

本大会の実行委員長である坂下町長自らがガイドを務めたアポイ岳ユネスコ世界ジオパークを巡る「ミニ巡検」では、親子岩やソビラ岩の景勝地、アイヌ民族の伝統家屋「チセ」、観光拠点である観光案内所、えりも漁協様似支所、アポイ岳ジオパークビジターセンターなどが、それらにまつわるエピソードを交えながら紹介された。アイヌ民族が守り続ける伝統文化や等澗院の興りなどの歴史的なこと、海岸に奇岩が立ち並ぶ地質的な理由、漁業や軽種馬など様似町の特色となっている産業に関すること、今後の町づくりに関する解説に参加者は熱心に耳を傾けていた。

また見学地の一つ、えりも漁業協同組合冬島支所では、支所長から日高昆布の等級による出荷先、出荷額の違い、根昆布のおいしい食べ方・使い方などについて説明があった。本州からの参加者からは実際に出荷予定の昆布を間近に見、手に取る体験は貴重であったとの感想が寄せられた。ミニ巡検は限られた時間内で駆け足となったが、様似町の見どころを網羅する行程に参加者からはアポイ岳ユネスコ世界ジオパークの魅力の一端が理解できた、町長のガイドは聞く人を飽きさせなかったと好評の声があがっていた。



SDGsから考えるジオパークと 持続可能な社会

企画・運営

黒井 理恵（株式会社DKdo、なにいろ工房）

コーディネーター

溝渕 清彦（環境省北海道環境パートナーシップオフィス、北海道地方ESD活動支援センター）

概要

SDGs（持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals）は2015年に国連加盟193か国が決定した、2030年の達成を目指す国際的な目標である。ユネスコのプログラムであるジオパーク活動においても、持続可能な社会づくりの文脈から、SDGs達成への貢献が期待されている。しかし一般社会においてSDGsの認知度は高いとはいえず、また、目標そのものはグローバルな視点で設定されているため、身近なものとして捉えにくい。このためSDGsについては、さらなる周知を行うとともに、地域の活動にふりかえて理解し、活用していくことが可能になるよう、対話の機会を設けていく必要がある。

そこで分科会8では、SDGsの基礎的な知識を共有するとともに、SDGsが志向する環境課題と経済・社会課題の同時解決の重要性や、ローカルとグローバルの動きの連動性について気づき、次代のジオパーク活動につなげていく場づくりをすることを目的とした。主な活動内容としては、一般社団法人イマココラボ（東京都）が開発したカードゲーム「2030 SDGs」を体験し、そのふりかえりをとおして、ジオパーク活動とSDGsがどのようにに関わりを持つのか、持続可能な社会づくりにSDGsをどのように活用できるかというテーマに関して意見交換を行うものとした。

※カードゲーム「2030 SDGs」 <https://imacocollabo.or.jp/games/2030sdgs/>

（一般社団法人イマココラボ）

内容

情報提供・カードゲーム進行

黒井 理恵（株式会社DKdo、なにいろ工房）

溝渕 清彦（環境省北海道環境パートナーシップオフィス、北海道地方ESD活動支援センター）

10月6日(土)

14:00～14:40 分科会趣旨説明、カードゲーム「2030 SDGs」導入

14:40～15:30 カードゲーム「2030 SDGs」実施

15:30～16:00 カードゲーム「2030 SDGs」ふりかえり

10月7日(日)

9:30～10:00 SDGsに関する補足説明、1日目のふりかえり

10:00～10:30 グループでの対話と全体共有

テーマ：あなた自身が豊かな地域・社会づくりの担い手であるならば、あなたはこれから何をしていきますか

10:30～11:20 グループでの対話と全体共有

テーマ：「2060年、ジオパークがあつてよかったね！」と言われていました。どうしてでしょうか

11:20～12:00 ジオパーク活動とSDGsの掛け合わせによるアイデア発想

ふりかえり

テーマ：ジオパーク活動を進めるにあたって、「私たちはこれから、こういう視点を大切にしていきたい／こういった取り組みをしていきたい」と思いませんか

まとめ

1日目に実施したカードゲーム「2030 SDGs」は、世界における環境・経済・社会の関わりや、個人の動きと世界の動きが繋がっていることを模擬的に体感できるゲーム。分科会では参加者が3人1組で、チームごとに割り当てられた目標を達成するべく、限られた資金と時間を用いて、様々なプロジェクトの実行（実行によりチームの保有する資源や世界の状況が変化する）に知恵を絞った。

ゲームの局面は前半と後半に分かれており、その中間で、世界の状況が参加者全員と共有される。この状況は環境・経済・社会のパラメーターで表現されており、今回の分科会では経済が突出して好調、環境・社会が危機的状況にあるというものだった。そこから社会、そして環境の状況が飛躍的に改善されていったが、最後のふりかえりでは、中間発表によって状況を認識した参加者の中に、自分のチームの目標達成だけではなく「社会全体をよくしようという考え」が生まれ、周囲との交流が進められ、柔軟な交渉・連携が行われるようになった。ということが確認された。「可視化による状況の把握・共有」や「柔軟なコーディネート」が重要であるという気づきが、各チームから聞かれた。

2日目には、SDGsについての補足説明がなされた後、SDGsのバックキャスティングの（未来から現在に引き寄せて考える）考え方を用いて、ジオパーク活動が2060年の地域に貢献している姿を想像。「防災や観光の強みを生かし（ジオパーク活動に取り組んでいる）地域が残っている」「地域の資源の保全により、文化が守られている」などの意見が共感を集めていた。次いで、そのビジョンを現実のものとしていくために、ジオパーク活動の「保全」「教育」「観光」とSDGsの17のゴールを掛け合わせるアイデア発想のワークを実施し、最後に全体を通じてのふりかえりを実施。「次世代に継承していく視点」や「世界の問題に目を向ける視点」など、より広い時間軸・空間軸で活動を捉えていくことや、多様な主体とつながることの重要性が確認され、その趣旨が分科会からの宣言に盛り込まれた。

企画運営者の 総括・感想

カードゲーム「2030 SDGs」については、ゲーム中の各参加者の動き方に「その人の普段の動き方が表れる」とのことであったが、「手詰まりになり、ただ座っていた」「自分の目標達成以外に何もしなかった」等のふりかえりもあった。また、会場全体に声かけをして世界の状況を変えていこうとする参加者もほぼいなかったように見受けられた。

最後のふりかえりで「地域との協働・ネットワーク」をキーワードに掲げたグループも多かったことから、SDGsに関する学びと気づきを通して、「地域との協働・ネットワーク」を強みとしていく必要性が、あらためて意識化されたのではないと思われる。

また一方で、カードゲーム「2030 SDGs」を含めたこうした対話の設計が、持続可能な社会づくり、ひいてはジオパーク活動に対する認識の更新に有効であろうことも推測できた。多様な主体とともに持続可能な未来を考え、実践していくジオパーク活動に期待したい。

（溝渕）



オーラルセッション概要 (様似図書館視聴覚ホール)



10月6日(土) 14:00～16:00 10月7日(日) 9:30～12:00

今大会では、発表者が能動的に自身のジオパーク活動を参加者と共有できる機会を増やすとともに、参加者が新しい情報に出会い、自身のジオパーク活動へ応用・実践できる機会を増やすためにオーラルセッション（事例発表セッション）を開催した。

No.	日付	時間	コーディネーター		団体名	発表者	標題
1	1日目 10月6日 (土)	14:00～ 14:15	廣瀬 亘 (道総研)	殿谷 梓 (徳島)	防災科研 ・糸魚川	松原 誠 竹之内 耕 西澤あずさ 青井 真	「防災科研 地震だねっと!」の開設
2		14:15～ 14:30			阿蘇	池辺伸一郎 兒玉 夏子 宮北 志野 高森 秀平 石松 昭信 鍵山 恒臣 鳥井 真之 鶴田 直之	地震や噴火等による自然災害の防災 教育等への活用
3		14:30～ 14:45			山陰 (多鯉ヶ池)	飼牛 明	地域住民が行うジオパークの未来づ くり
4		14:45～ 15:00			室戸	小笠原 翼	ジオパークが提供する「集まりの場」 ー地域住民の新たな出会いの場ー
		コーヒーブレイク (15:00～15:15)					
5		15:15～ 15:30	横山 光 (北翔大)	郡山鈴夏 (山陰)	立山	山岡 勇太 今堀 喜一 志村 幸光	立山黒部ジオパークにおける地元メ ディアとの連携事例
6		15:30～ 15:45			天草	鵜飼 宏明	見どころの保全と活用
7		15:45～ 16:00			糸魚川	竹之内 耕 宮島 宏 茨木 洋介 小河原孝彦	フォッサマグナパーク (糸魚川ー静岡 構造線の断層見学公園) のリニューア ル



No.	日付	時間	コーディネーター		団体名	発表者	標題
8	2日目 10月7日 (日)	9:30～ 9:45	大野希一 (島原)	片山美雪 (下仁田)	隠岐	長田 樹	学習指導要領×ジオパーク＝隠岐スタイルの学校教育
9		9:45～ 10:00			室戸	堺 喜久美	室戸ジオパークガイド団体の変化と多様性
10		10:00～ 10:15			豊後大野	芝崎 聡通	地域資源を活用した新たな「滞在型周遊観光ツアー」の展開
11		10:15～ 10:30			浅間山・三陸	山田 雅仁 杉本 伸一	日本ジオパーク委員会による現地審査報告書から見た審査体制の特徴
12		10:30～ 10:45			山陰海岸	先山 徹	北前船によって流通した石材の研究とジオパーク間の連携の可能性
		コーヒープレイク (10:45～11:00)					
13		11:00～ 11:15	鵜飼宏明 (天草)	新名阿津子 (伊豆)	島原	森本 拓	土石流被災家屋保存公園におけるジオガイドのガイド有料化への取り組み
14		11:15～ 11:30			室戸	千頭 利智	室戸の「ジオパークホテル!?」構想
15		11:30～ 11:45			豊後大野	渡部 順子	「大分の野菜畑ぶんどおおの」・ジオパークの恵みを食で伝えることの意義
16		11:45～ 12:00			栗駒	佐藤 充	栗駒山麓ジオパーク特産商品「栗駒山麓のめぐみ」の取り組みを通した持続可能な地域振興の試み

